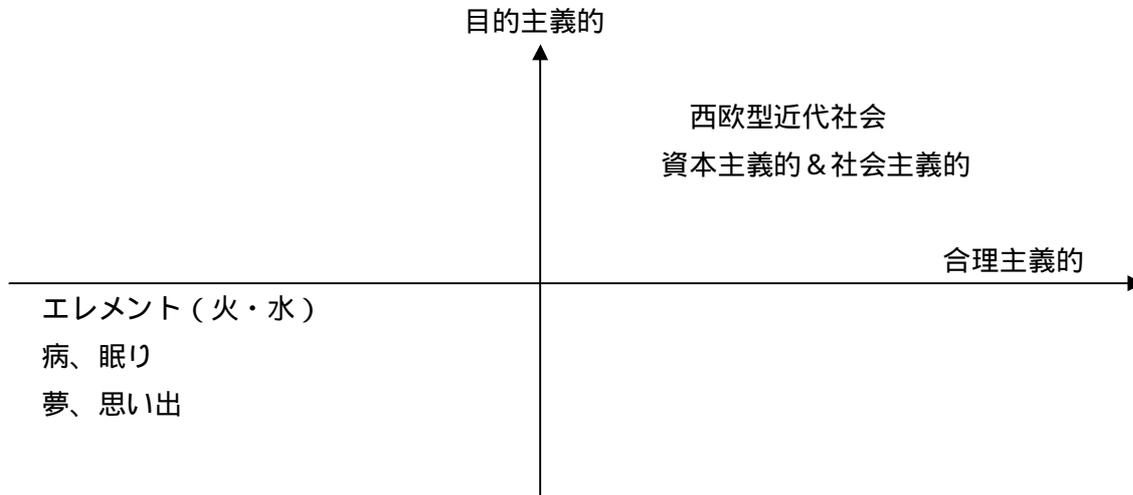


【タルコフスキーの映画における世界観】  
(ベルリンの壁崩壊以前)



**人間** < 近代的概念 > 目的を遂行しながら進化していく

望郷の病にかられて死すべき人間 (ノスタルジア)  
ゾーンに侵入するも矛盾と向き合うことになる人間 (ストーカー)  
ソラリスに来て自己崩壊をきたす人間 (惑星ソラリス)

**言葉** < 近代的概念 > 合理的かつ万能なコミュニケーションの手法

吃音の少年 (鏡)  
言葉をしゃべらない少年 (サクリファイス)  
障がいを持っている子供 (ストーカー)

**鏡** モダニズムを乗り越える道具として (= 正しく映さないのに本質的である)

フォトジェニックでもある水、雨、霧、雪  
ノスタルジアの望郷のイメージ  
ソラリスの海  
ゾーンの中にある部屋  
母を映す鏡

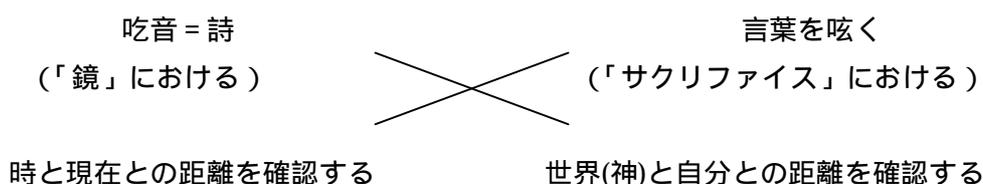
世界は、合理的に制御することが出来る存在であるばかりではない。  
人間は、目的に向かって進化をし続ける存在であるばかりではない。

(ソビエト社会主義体制 + 近代資本主義社会) 両方の上位概念としての「近代」批判

エレメントの回復  
儀式や神秘等なものの力の回復

ことば

はじめに言葉ありき (はじめに人間ありきではない)



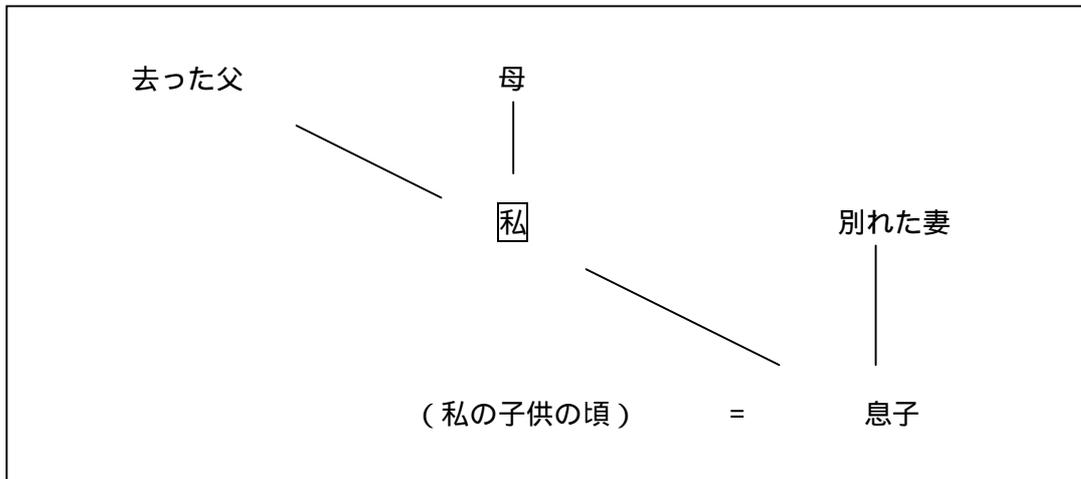
今失われていこうとするもの  
今回復しようとしていくもの  
吟き

プンクトゥム  
(ロラン・バルト的言説)

タルコフスキーにおいて、「言葉」とは、決して現代的情報伝達的手段ではない。慢心や錯覚や偽善のもとに活動する人間よりも先立って存在する「真理」のようなものではないか？「吟くこと」はきっちりとコミュニケーションされることによっては生じにくい「想像力」を掻き立てたり、聞き逃すまいとする他者の「感性を喚起」させる。独白とコミュニケーションの境目は他者と自己の境界、意識と無意識(眠り)の境界、伝えたいことと秘めておきたいことの境界でもある。「吟くこと」が意味内容から無媒な感情が溢れ出させ、そのことにより「言葉」の本質が開かれてくるのではないか。そして、「言葉」と「吟き」のはざまには、自己と世界の本質を映し出し、吟きという曖昧な行為を促す「鏡」が存在するだけなのだ。

## アンドレイタルコフスキー「鏡」の解説

伊東恵司による



< 過去の = 子供の頃の > = 夢に見る

私の母親への思い

私の父親への思い

私の社会への思い

私の身近な世界への思い

< 現在の = 過去を振り返る身振りの中での > = 思い出す

子供の頃の自分への思い

今にして思う母親の気持ちへの思い

今にして思う父親の気持ちへの思い

今にして思う当時の社会への思い

今にして思う当時の身近な世界への思い

< 現在の = 現在を見渡す身振りの中での > = 思い巡らす

自分の子供に対する思い ( 思いの届かなさを含む )

自分の別れた妻に対する思い ( 気持ちのずれを含む )

< 現在の = 将来を思い描く身振りの中での > = 予感がする

別れた妻が母と同じ苦勞をするであろう予感

自分の子供が自分の子供の頃と同じ様な視線で自分の妻を見るであろう予感

### 【ストーリー的なもの】

私の夢に現われる母。うっそうと茂る立木に囲まれた家の中で、母はたらいに水を入れ髪を洗っている。鏡に映った、水にしたたる母の長い髪が揺れている。あれは 1935 年田舎の干し草置場で火事があった日のこと。その年から父は家からいなくなった…。

私は突然の母からの電話で夢から覚め、エリザヴェータが死んだ事を知らされた。彼女は、母がセルポフカ印刷所で働いていた頃と同僚だった。両親と同様、私も妻ナタリアと別れた。妻は、私が自信過剰で人と折り合いが悪いと非難し、息子イグナートも渡さないと頑張っている。

妻のもとにいるイグナートのことは、同じような境遇にあった自らの幼い日を思い出させる。赤毛の、唇がいつも乾いて荒れていた初恋の女の子のこと。同級生達と受けた軍事教練のこと。それは戦争と、そして戦後の苦難の時代でもあった…。

映画は、"私"による一人称形式で進行し、"私"が胸に秘めている母への思いや、別れた妻や息子との間に織りなされる感情の綾を意織下の過去と現実を交錯させながら浮かびあがらせていく…。

### 【呟き】

我々の生きている時間と世界は手に触れられるものだけで構成されるものでもない。歴史は書籍が伝えるものだけでもない。

例えば、「思い」は世界の一部であろう…。「夢」も世界の一部であろう。「思い出」や「予感」が現在の時間に含まれているとしたら、いや、気持ちの「ずれ」や「誤解」までもを含めているとしたら、我々を取り巻いている時空は2重3重もの多層的なものになっていることに気づく。例えば同じ現象であっても時間が経ってから思い出すことによって全く別の事象に見えてくるといことはないだろうか。

人には鼓動が、樹木には樹液や葉ずれの音があるように、無音に見えるものは音に満たされている。瞳を閉じたら夢や思いが広がっていくように、世界には秩序や論理とは違う次元の「豊かさ」や、眩暈のするような「ざわめき」で満たされている。

タルコフスキー独特の巧みな演出は、木立を抜ける風のそよぎにも人間の心象を映し出して見せると言われてきた。この作品でも、"水"や"火"といった自然現象がこの監督独自の映像となって、美しい幻想的なイメージのなかに繊細かつ鮮明に語りあげている。時間軸をずらし、意識下の過去と現実を巧みに交錯させて作者の深層心理を浮き彫りにしてゆくこの作品は、作者の深層心理を鮮烈なイメージにして浮かびあがらせた映画による詩と言えよう。また、ソ連成層圏飛行、スペイン戦争、第二次世界大戦、中国の文化大革命、中ソ国境紛争(ダマンスキー事件)などの数多くの記録フィルムの断片が随所に挿入されることにより、歴史の時間と個人の時間とが溶け合い、相互に内包関係を持っているように描き示されている。

母の描写に挿入される詩は、監督の父アルセニー・タルコフスキーの作品で、監督自ら朗読している。それは、思いを明確伝えるでもなく封印するでもない…、「呟き」とも言える。